

グランド・ホテル

2007(平成19)年9月15日鑑賞(OS名画座)

★★★



監督＝エドモンド・グールディング／脚本＝ウィリアム・A・ドレイク／原作＝ヴァッキー・パウム／出演＝グレタ・ガルボ／ジョン・バリモア／ジョーン・クロフォード／ウォレス・ビアリー／ライオネル・バリモア (シネカノン配給／1932年アメリカ映画／114分)

第2章

映画は俳優で観る！

……今から75年前、1932年当時の2人の女性と3人の男性をメインとした「グランド・ホテル形式」で描かれる人間模様は今でも新鮮そのもの。『THE 有頂天ホテル』(05年)の喜劇・パロディも楽しかったが、やはり1度はホンモノを観ておかなければ……。『金がすべて』の風潮の昨今そして「教育再生」の議論が遠のいた今、ジェントルマンの生き方をこの映画から学ぶ必要があるのでは……？

1932年のベルリンが舞台だが……

関東軍が奉天(現在の瀋陽)郊外の柳条湖で鉄道を爆破し、満州事変が勃発したのが1931年9月18日。翌1932年1月には第1次上海事変が勃発し、3月1日には満州国の建国が宣言された。そしてその年5月15日には5・15事件が起り、翌1933年3月27日遂に日本は国際連盟を脱退した。

そんな時代に、アメリカの映画会社MGMは70万ドルの予算で豪華なホテルのセットを製作し、5人の主役級俳優をオールキャストで配するという、当時としては画期的な娯楽大作を製作し、見事第5回アカデミー賞作品賞を獲得した。

この映画の舞台は、第1次世界大戦の敗戦後間もないドイツのベルリンにある高級ホテルの「グランド・ホテル」。そして、ナチスの台頭する直前のワイマール憲法下にあったワイマール共和国は、東の間の自由と平和を享受していた。ちなみに、その象徴となったのが1930年のマレーネ・ディートリッヒ主演の『嘆きの天使』で、全世界で大ヒットしたが、1933年にナチス・ヒットラーが政権を握るとこの映画は「頹廢性」を理由に上映禁止とされてしまった。しかし、「グランド・ホテル」はそん

な政治的な不安や軍隊の足音など何も感じさせず、いつものようにホテルの中で展開される人間模様の1コマが……。

「グランド・ホテル形式」とは？

「一つの場所を舞台に、複数の人々のドラマを並行して描く」ものを「グランド・ホテル形式」と呼ぶこと、そしてそれが1932年の映画『グランド・ホテル』に由来することを、私は2006年に映画検定の受験勉強をした時はじめて知った（『映画検定公式テキストブック』202頁）。

ちなみに、三谷幸喜監督がその日本版として監督したのが『THE 有頂天ホテル』（05年）。大晦日の夜、一流ホテル内でくり上げられるカウントダウンをめぐるドタバタ劇は涙あり（？）感動ありの、これぞエンターテインメント映画という傑作だった（『シネマルーム9』288頁参照）。それくらいの知識を前提として、いざ『グランド・ホテル』の出演者は誰、と確認しようとしても、団塊世代の私ですら、知っているのは落ち目のバレリーナであるグルシンスカヤを演じたグレッタ・ガルボだけで、その他は俳優の名前を聞いてもピンとこない人ばかり。したがって、今ドキの若い人たちがそんな俳優を誰も知らないのは当然だし、こんな映画があることすら知らないのも当然。その結果、「グランド・ホテル形式」の由来となった映画『グランド・ホテル』を今日鑑賞しているのは100%年配者ばかり。

これでは「グランド・ホテル形式」という言葉がいつまで継承されるのかも不安。近い将来は「THE 有頂天ホテル形式」と言い換えられることになるのかも……？

2人の女優のキャラがキラリと……

この映画の表看板は、「スクリーンの女神」と称えられたグレッタ・ガルボ。1905年生まれの彼女は、無声映画（サイレント）からトーキーへの変革期の中を、そのハスキーで野太い声が観客に大受けし、「サイレントの名花」から「トーキーの大スター」へと成長していった女優。1932年当時の彼女の年齢は27歳だから女優として最も美しい時期だが、『グランド・ホテル』では、人気が落ち目となったバレリーナの大きく揺れ動く女心を印象深く演じている。

そんなグレッタ・ガルボを中心として進められる撮影に反発したのが、当時人気実力共にグレッタ・ガルボに迫る勢いだったジョーン・クロフォードとのこと。そのため、

撮影中女速記者フレムヒェンを演じるジョーン・クロフォードとグレッタ・ガルボは顔を合わせることもなく、共演シーンは1つもなしになったというエピソードまであるらしい……。いくらグランド・ホテル形式とはいえ、やはり女の闘いはすごいが、さてあなたはどちらのキャラが好き……？

フォン・ガイゲルン男爵のキャラがこの映画のポイント

主役級の男女がたくさん登場すると、どうしても観客の目は華やかな女優の方にいきがちだが、『グランド・ホテル』はそうではない。それは何よりも、フレムヒェンとグルシンスカヤという2人の女性に恋をする(?)、フォン・ガイゲルン男爵(ジョン・バリモア)のキャラがすごく魅力的だから。つまりフォン・ガイゲルン男爵のキャラがこの映画のポイントだ。

フォン・ガイゲルン男爵は、男爵が本職なのかそれとも泥棒が本職なのかよくわからないミステリアスな男性だが、その行動や言葉遣いは、「これぞジェントルマン！」と感心させられるものばかり。彼が、ごく自然にグランド・ホテルに宿泊する人々と交流を深めているのか、それともある狙いを持って目的意識的にそうしているのかはわからないが、結果的にこのフォン・ガイゲルン男爵が人々の間をとりもつことによってあれこれの人間関係が形成されていくから、その心遣いは大したもの。もともと、主役級5人のうち彼だけが、再びホテルから外に出ていくことができなくなったのは少し残念だが……？

2人の対照的なキャラも面白い……

高級ホテルに泊まれるのは大金持ちや地位の高い人々だけと一般的に考えられているが、「そんなことはない。お金さえあれば俺だって」と宿泊を申し出たのがクリンゲライン(ライオネル・バリモア)。彼は病気のため余命いくばくもないと宣告されたことによって、死ぬまでに人生観を180度転換することに。すなわち、それまで一生懸命働いて貯めてきたお金を使わなければ無意味だと悟った彼は、今日からは一流ホテルに泊まってぜいたくをし、食事や音楽を楽しみ、〇〇も△△もしようと心に決めたわけだ。

これに対して、ずっとグランド・ホテルに宿泊している、大企業のオーナーであるプレISING(ウォーレス・ビアリー)は会社の合併話をまとめるのに忙しそう。そ

の様子を見ているとかなり焦っているようだが、それを交渉相手に知られてはダメ。そのため懸命に虚勢を張りながら頑張っていたが……。

このプレイングの会社の経理係として働いてきたクリングラインは、プレイングのおかげで苦勞させられたとプレイングを恨んでいるのだが、プレイングにしてみればクリングラインは虫けら同然の存在……？

こんな対照的な2人のキャラが面白いが、そんなクリングラインに対して親しく声をかけて側面から何かと応援したのがフォン・ガイゲルン男爵。また、女速記者のフレムヒェンは、プレイングが合併話の書類づくりのために呼んだ女性だったが、廊下で待たされている間にフォン・ガイゲルン男爵と親しく話をする中でたちまちうちとけていくことに……。こんなさまざまなキャラのグランド・ホテルの宿泊客が交差する中で展開されるさまざまな人間模様が、この映画の面白さ……。

ホテルにおける人間模様は、人生の縮図

映画の冒頭、ホテルの電話を取り次ぐ、いわゆる「電話交換手」の女性たちの職場が登場する。今では完全に失われてしまったこんな職種には懐かしいものがあるが、彼女たちの取り次ぎを通して電話で話しているのが、5人の主人公たちやそれに次ぐ準主人公たち。人それぞれ自分の人生が展開されているのだから、電話は不可欠な情報伝達手段。

5人の主人公のうち、グルシンスカヤとフォン・ガイゲルン男爵そしてプレイングは従前からの宿泊客だが、クリングラインは今やっと申し込みが通り部屋をキープしてもらったところ。またフレムヒェンは速記の仕事のためにプレイングの部屋に入っただけで、宿泊する予定など全くないもの。この映画が描くグランド・ホテル内の人間模様はわずか1日半だけ。その1日半のうちに、5人の主人公たちの人生はどんな変化を遂げていくのだろうか……。9月12日の安倍晋三総理の突然の辞職表明にみられるように、政治の世界はまさに一寸先がヤミだが、それは人生だって同じ……。

五人五様の人生模様は……？

①人気の陰りのため客足の少なくなった舞台に絶望し、今日の舞台には出演しないとダダをこねていたグルシンスカヤは、この1日半の間にどんな人生の変化を……？

②プレイングの速記役を務める中、プレイングに気に入られたらしいフレムヒェンは、明日のフォン・ガイゲルン男爵とのダンスを楽しみにしていたが、さて彼女の人生の選択は……？

③相棒から泥棒稼業をまじめにやれとハッパをかけられていたフォン・ガイゲルン男爵は、その約束を果たそうと努力するものの、その成果は？ 他方、誰からも好かれる好キャラの彼が否応なく陥っていく運命とは……？

④死を間近に受けとめながらはじめて人生を生きたと実感するクリングラインは、グランド・ホテルの中で新しい体験ばかり。そして、フォン・ガイゲルン男爵や魅力的な女性フレムヒェンとの交流が実現し、カード賭博でもビギナーズラックで幸運ばかりだが、さてそれはいつまで続くの……？

⑤合併話に精を出していたプレイングの交渉結果は？ そして、否応なく対立関係となってしまったクリングラインやフォン・ガイゲルン男爵との争いの結末は……？

5人の主人公については、それぞれそんな五人五様の人間模様が展開されていくのでは……？ そんな、今から75年前の映画とは全然考えられない5人の主人公たちの新鮮な人間模様と、グランド・ホテルの中で見る人生の縮図をタツプリと楽しみたいものだ。

2007(平成19)年9月15日記